

Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.77

試 行 錯 誤



お祭りの日 ©森枝卓士

特集 タイの地域開発と JVC

開発途上国の居住問題と NGO の役割	2
私とスラムの 226 日	10
コメンからの手紙	14
CD(地域開発)チーム, 最近の報告書から	16
JVC NEWS	18
NGOを訪ねて	20

開発途上国の居住問題とNGOの役割

——タイを中心として——

海老塚 良吉

昨年の国際居住年を記念して名古屋、横浜、江ノ島で開催された国際会議では、建設省や県、市などの主催する会議であるにもかかわらず、開発途上国の居住問題に関わるNGOの活動が議論の中心テーマの一つとなった。ところで、日本ではこれまで、居住分野の政府レベルでの国際協力、国際協力事業団の研修事業を除いてほとんど実施されていない。また、NGOの国際協力についても、居住関連の活動はほとんど行われてこなかった。

しかし、居住問題の国際年が設定されたことからわかるように、開発途上国の居住問題は、現在、きわめて重大な局面を迎えている。本稿では、このような状況下で、今後、日本のNGOがどのような役割を期待されているのかを考える上での判断材料の一つとして、タイを中心に開発途上国の居住問題の現況と対策、先進国及び日本の開発援助対策の流れなどについて、紹介する。そして、JVCの活動を外から見ている一會員の立場から、JVCがこの分野で専門的知識、経験を次第に身につけ、同時にODA(政府開発援助)を利用して資金力を補強し、大きく活動を伸ばしていくことを提案したい。

開発途上国の居住問題

膨張を続ける途上国の都市人口

開発途上国の中で居住問題が注目されるようになったのはそれほど古いことではない。産業開発の主導により経済的離陸が図られるとした楽観的な1960年代までの開発戦略が、国全体の生産力は増大させたものの、国民の多くを占める低所得者層の生活水準の向上には寄与せず、貧富の差の拡大、生活環境・自然環境の悪化などの副作用をもたらした。そのため1970年代になると、1972年のストックホルムの世界環境会議、1976年のバンクーバーでの人間居住会議など、世界的な規模で環境や居住問題が議論されるようになった。

もちろん、この開発途上国での居住問題の背景には、都市への急激な人口集中があげられる。1960年には先進国の都市人口は4.5億人、開発途上国の都市人口は3.1億人であった。1980年には、都市人口は先進国では6.6億人となり2.1億人増加したが、開発途上国では6.9億人となり3.8億人増加した。そして2000年までの次の20年間には都市人口の増加数は、先進国では2.4億人に過ぎないが開発途上国では7.4

億人に達すると予測されている。同じ20年間の開発途上国の農村人口の増加数である8億人に比べれば、都市人口の増加は絶対数としてはやや下回るが、増加率の高さ、狭い都市地域での増加であることを考えると、問題の深刻さが理解できよう。都市人口の増加を地域別にみると、とりわけアジアで問題が深刻なことが分かる。アジアの都市人口(先進国を含む)は1960年に2.65億人であったが、2000年には9.93億人に増加すると予想されている。

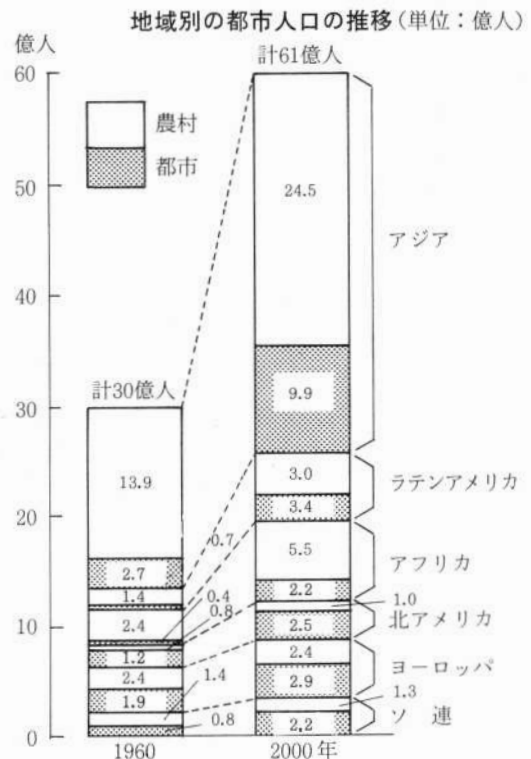
開発途上国の都市化については、適正な都市化のスピードを上回っているのではないかと考えることもある。農村開発が失敗し、地方に雇用の機会が少ないことなどが原因となって急激に都市化が進行したと言われ、国土全体のバランスのとれた開発が行われていれば、都市化の速度をこれまでよりも遅く出来たのではないかという考え方である。過剰都市化と言われるこの理論のもとに、大都市への人口の流入を規制している社会主義の開発途上国もいくつか実在するが、何れの国でも、住民登録の規制をくぐり抜けるなどして都市へ人口の集中が進んでいる。また、若年人口の多い都市では自然増加率も農村に比べて高い。今後、均衡のとれた国土開発が仮に行われたとしても、都市人口の増加は避けられないと思われる。

それでは、タイの場合はどうなっているのか。バンコク首都圏（以下、バンコクと記す）の人口は、1947年の80万人から1984年の520万人へと急増している。人口増加率そのものは、1975年の5.3%をピークにして低下傾向にあり1980年には3%にまで下がっているが、人口増加数は年間に15万人程度とまだ大きいことに変わりない。このような人口増加の圧力の下で、バンコクには深刻な住宅問題があり、多数のスラムが存在する。経済開発の効果を享受できる人々は、先進国の住宅と同様な、場合によってはそれ以上の住宅に住んでいるが、開発の恩恵に浴することができない多数の低所得者層は、住宅価格と家賃の高騰に悩まれ、安い土地を求めて、湿地や交通の便が悪く設備等も劣る郊外部に住居を得ている。

居住環境の劣悪なスラムに居住している人々の数は、スラムの定義が明確に規定できるものではないこともあって、調査により違いがみられる。公的統計としてはタイの住宅公団（NHA）の1981年の調査があり、バンコクのスラムは410地区で、55万1420人が居住しているとしている。しかしこの数字は小規模のスラムを除外したものであって、ソポン・ボン・チョクチャイ他による調査（1985年）では、1020地区（ただし、この内75地区はバンコク地域外）、101万人が住み、1地区当りの世帯数は15～7390世帯に分布し、350世帯以上の大規模スラムが114地区に存在するとしている。また半数の地区は都心より半径6.5キロメートル以内に位置していると述べている。（この調査報告書は、JVCほかの4つのNGOがスポンサーになって印刷・発行されている）

強い地主に泣かされる借地人

タイのスラム居住者の場合、他の多くの開発途上国と異って土地を不法占拠している人々（スクォッター）の数は比較的少なく、スラム居住者約100万人の内の15%以下が河川沿いや鉄道敷き、未利用の港湾用地等に住宅を建て、不法占拠している程度である。残りの大部分は土地を借り、その土地の3分の1は公有地、3分の2が民有地と言われる。これらの借地関係は日本の場合と異なって、借地人である居住者の権利が弱く、借地の約束を地主と取り交わして地代を支払っているスラムの場合であっても、契約期間の定めがなかったり、期間が1～2年と短かい場合が多く、極めて安い立ち退き料で追い出されることがしばしばある。



日本の借地契約では、借地法の規定により、木造等の非堅固な建物であっても借地契約の最低の期間を20年間で定めており、期間の明示がなくても、またこれより短い期間が明示してあっても20年間の借地権を認めて居住者の権利を守っている。タイの場合は、日本でこの借地法が制定された大正時代以前の、地主の所有権が大幅に認められた状況に現在もある（大正時代に地主が借地人を追い出すために所有地を他人に売却したり、放火により家を燃やしてしまい、借地権を滅失させる手法が採られたが、タイではこれが今も普通に行われている）。安心して住み続けることの出来ないという土地問題が、住居の改善が遅れる最大の要因の一つとなっている。

バンコクのスラムの概況について、シュロム・エンジェル他は次のように紹介している。「一戸当りの床面積は30～80平方メートルのものが多く、一階建てまたは二階建てで、同居世帯が多い。一戸当りの敷地面積は40～80平方メートル程度で、1ヘクタール当り125～188世帯（＝1ライ当り20～30世帯）の居住密度となる。地代は月一戸当り2～3ドルと安い。地主は水道や電気で大きな収入を得ることができる。スラムは数戸から数百戸の集まりで市内の各地に存在し、大部分が道路から入りにくいところに位置している」。

スラム地区の物的状況等について、古いデータであるがタイ住宅公団（NHA）の1975年調査（108地区、約17万人対象）では次のように示している。土地が乾いているところは23%で、残りの77%は雨期等には常時浸水しているような低湿地である。電気については、隣家等から引き込みをしている22%を含め、99%に設備されているが、給水については54%に設備されているだけであり、33%は水売り人から購入している。各住戸へと通じる道路の幅は、1mが61%、2mが14%と大部分を占めており、排水溝が設置されているのは23%に過ぎない。土地の権利関係については、公有地を借りているのが45%、民有地を借りているのが35%となっていて、借地権の確保がほぼ全居住者にとって大きな課題であることが分かる。このような物的状況にあるにもかかわらずスラムに居住しているのは、職場への接近性のためであり、57%の人が職が不安定になるのを恐れて移転を希望していない。そしてスラムには中流階級を志向しているしっかりとしたコミュニティーが形成されており、雇用についても少しずつ改善されている。同調査によればスラム居住者の平均世帯月収は1700バーツである。

スラムは近年確かに改善が進んでいて、例えば平均世帯月収についても、1984年のソムチット他の調査によれば、3700バーツになっている。ソボン他の1985年調査によれば1020の地区の内これまでに180地区で改善事業が実施されてきており、スラム居住者の3分の1が便益を受けている。地区数に比較して便益を受けている人数が多いのは比較的大規模なスラムで改善事業の実施率が高いためである。改善工事によってアクセス道路がコンクリート舗装に変わり、水道管が敷設され、排水路が整備され、住宅自体も少しずつ改良工事が加えられつつある。

バンコクのスラムに居住している人々にとって、最大の問題点は、居住環境よりもむしろ、現在住ん



スラムの台所。外食が多いので調理はあまりしない。

でいるところから追い出されてしまうことである。都心から半径5キロメートルの範囲では、スラム居住者数の60%が地主から立ち退きを迫られており、バンコク全体でも、スラム居住者の38%の人々が立ち退き要求を受けている。

スラムの居住環境と収入

一般の住宅の水準はどのようになっているのか。1980年の人口・住宅調査によれば、バンコクの住宅数90万戸の内、部屋数が1室28万戸、2室28万戸、3室18万戸、4室以上9万戸となっている。また、飲み水がパイプを通して各戸まで供給されているのは66%、水売りから買うなどが17%、隣家から分けてもらうなどの自宅外の水道を利用しているのが8%となっている。

この様にタイの居住水準が全般的に低いのは、住宅価格、家賃に比較して所得が低いためである。すなわち、タイの一人あたりGNPは1980年に770ドルで、日本の1万ドルの10分の1以下である。少し古いデータであるが、1980年に発行の報告書から所得と建築費の関係を見るなら次のようになる。バンコクのスラム居住者の平均月収は、1000～1700バーツ（1976年当時のレートで1バーツ＝15円）である。一方、バンコクで一般に取り引きされている最小限の宅地を購入するとすれば、場所にもよるが4万バーツ程度であり、家付きの場合には7万から9万バーツはする。平均的な住宅を買うとすれば、15万から30万バーツが必要であり、通常、住宅市場では低所得者を相手にしていない。

しかし、スラムの中に住んでいれば1カ月の地代、家賃は極めて安い。1981年の調査によれば、スラムの持家世帯の地代は、110サンプルのうち85%が100バーツ以下である。借家の家賃は38サンプルのうち300バーツ以下が29%、301～600バーツが45%、600バーツ以上は26%である。借室の場合家賃はサンプル37のうち301～600バーツが57%で残りは300バーツ以下である。1981年当時の下から30%の所得層の平均世帯月収は3300バーツであり（1981年、1バーツ＝11円）、低所得の人々にとっては、スラムは安い費用で都心に近いところに住める絶好の手段なのである。

住宅価格、家賃が高いのは、地価の高騰に起因するところが大きい。バンコクの人口が増加するにしたがって地価も急騰し、土地の投機がこの傾向に一層の拍車をかけている。バンコクの近郊に広大な空

スラムの家賃・地代

月額家賃・地代	地代	家賃	部屋代	不法占拠	合計
0パーツ	—	—	—	169	169
0-100	94	—	5	—	99
101-300	9	11	11	—	31
301-600	7	17	21	—	45
601-900	—	5	—	—	5
901-1200	—	4	—	—	4
1201以上	—	1	—	—	1
合計	110	38	37	169	354

き地があるにもかかわらず、安い土地を求めて住宅開発は郊外部に延びて行き、バスで1時間半余りもかけて通勤する様な人々も多い。

タイの居住政策

スラムの移転

都市の成長に伴って増大するスラムやスクォーターなどの居住水準の劣悪な問題住宅に対して、開発途上国の政府は初期には、何も手をつけずに黙認する場合も少なくなかった。マニラのトンド地区やバンコクのクロントイ地区は、いずれも政府の港湾施設予定地が何年間にもわたって未利用のまま放置されていた間に、巨大なスラム地区として定住者が増加したものであった。

しかし、都市の開発が進み、土地の高度利用がみられるようになり、都心部の土地の希少価値が高まるに従って、各国ともスラム居住者の追い出し・スラムの取り壊しを頻繁に行うようになった。追い出されたスラム居住者は多くの場合、近くの同様なスラムに住むようになるため、スラム・クリアランスは、スラムの解消につながらず、単にスラムを別の地区に分散させるだけのものであった。

スラム・クリアランスにより居住者は生活の根拠を失い、大きな打撃を受けるために、しばしば、住民の反対運動も起こっている。強制退去させる住民の問題が次第に無視できないほど大きな社会問題になるのに伴って、政府が郊外地区にスラム居住者の住むための場所を用意して、居住者を移転させる対策を講じることもみられる様になった。この様な、スラム居住者に新しい住宅地を無償または安い価格で提供するものが移住事業である。

不法居住者のために政府がやむをえず提供するというので、新しく用意された住宅地は、初期の移

住事業では、最低限の水準の都市サービスしか無いものが多かった。都心から遠く離れた山の中に移住地区が作られたり、水道や電気、道路や学校も満足にないなど、とても住めないような地区が多かった。最大の問題は通勤であった。都心まで30キロメートルから40キロメートルも離れた郊外部に地区が位置することが多く、道路の整備も十分ではないため、バスで都心まで片道1時間半余りもかかり、また、バス代が日給の20%以上にもなった。そのため移住先から、再び都心のスラムに戻り住む人々が後を絶たなかった。

公団による住宅建設の見直し

1970年代に入ると、いくつかの開発途上国では本格的な住宅対策に取り組み始めている。タイでは1973年に、それまでの住宅関連の4つの機関を統合して内務省の管轄下にある公企業体として住宅公団（NHA）を設立した。住宅公団が初めに採用した政策は、低家賃の中層住宅を大量に建設することであった。公団は第3期国土開発計画（1972年～76年）の中で3万4000戸の住宅建設を計画したが、実際には1万706戸を建てたに過ぎなかった。また、第4期国土開発計画（1977～81）では12万戸を計画したが実績は3万5868戸にとどまった。しかし計画数を大幅に下回ったとはいえ、NHAは1974年から1980年の間に約4万戸の住宅（賃貸アパート、分譲アパート、低層住宅）を建設し、これはこの間のバンコクの住宅増加戸数の15.5%に相当した。

建設が順調に進まない原因としては用地の取得難等いくつかあるが、その一つは建設コストである。中層住宅の建設コストは開発途上国の物価水準の中ではたいへん高いものになり（一戸当たり35平方メートルの中層住宅の建築費は1980年に7000ドルで、これは入居者の支払い可能額の5倍に相当）、低所得者層に供給するためには、政府の補助金を大量に必要とした。

また、中層住宅はスラムに居住してきた人々にとっては生活スタイルが合わずに不人気であった。日課としていた路地裏で行う水浴びもしくくなり、居住者を相手の小規模店舗の経営もできなくなった。スラムの取り壊しに伴う代替住宅として中層住宅に入居したスラム居住者のかなりの割合が、中所得者層に権利を転売して現金を手に入れ、再び別のスラムに居住しているという事実が多く報告されている。実際に低価格住宅に入居して住んでいるのは、政府

夫婦・兄弟等による住宅建設現場
(サイト・アンド・サービス事業)



関係の職員や大企業の雇用者などの、むしろ中・高所得者階層であった。この失敗の原因は、先進国で一般化している工業化住宅を十分に開発途上国の実態に適合させないまま、供給したことにある。

世銀の勧告もあって、住宅公団は1978年には中層住宅建設を一時ストップして計画の見直しを行い、79年より中層住宅の建設計画を縮小し、サイト・アンド・サービス（道路、水道などの基盤整備をした宅地供給）事業とスラム改善（現在のスラム地区内の水道、排水、歩道等の基盤整備）事業を開始した。スラム居住者の労働力を住宅の自力建設に活用し、限られた予算を使ってできる限り多くの世帯に恩恵が配分されるようにしたのである。

しかし、サイト・アンド・サービス事業の場合、大規模で地価の安い土地を求めてどうしても郊外に立地することになり、低所得者層にとっては、通勤費と通勤時間の負担が重くのしかかり、また、住宅金融制度が不十分ななかで建設資金を手当するのは容易ではなかった。78年から82年の間にサイト・アンド・サービスにより供給された住宅・宅地数は、若干の中層賃貸住宅を含めて、約1万5000戸にとどまり、第4期国土開発計画で予定していた12万戸が大きく落ち込むひとつの原因になった。

スラム改善事業

都市の低所得者層に最も人気があるのは、現在住んでいるスラム地区の改善事業である。改善の内容は、歩道のコンクリート舗装、給水設備、電気設備などの整備であり、一部では、排水・下水設備も整

備されたが管理が悪く使いものにならないことが多かった。また、ごみの収集もほとんど成功していない。しかし、整備水準は低くても、雇用機会を失うことはなく、また、コミュニティの経済・社会構造を損なうこともなく、自分たちの力で斬新的に居住改善を計ることが可能であった。

スラム改善事業は、1978年から83年の間、年間約5000世帯、合計して2万8000世帯（76地区）で実地されてきており、この資金として、世銀から2億1700万バーツ、タイ政府から5300万バーツの合計2億7000万バーツ（対象約4万世帯、一世帯当たり約7000バーツで日本円にして10万円弱）の融資が認められている。しかし、1984年から86年にかけてはスラム改善事業の新たな資金融資が認められておらず、NHAは現在、世銀が以前に承認済みの改善事業の残り分を実施している。

改善事業の資金がストップしている理由は、国家予算に占める海外からの借入金の返済比率が20%を越えていることの他、タイ政府としては住宅公団を独立採算の公企業体として機能させていきたいと考えており、スラム改善事業のような採算の取れない福祉的な事業は、バンコク首都圏自治体（BMA）に委ねていこうとしていることがある。しかし、これまでの住宅公団の事業実施体制を簡単にBMAが肩代りできるのか不安が残る、事業分担の変更は好ましいことなのか疑問が残されている。

スラム改善事業は、また、土地所有者から将来の転売の機会を損なうものとして嫌われ、改善後は、居住者にとって、地代や家賃の値上がりを招くという問題も指摘されている。しかしこれらの問題を含みながらも、スラム居住者にとっては現在のところ最良の方策と思われる。

スラムに対する行政の対応は、これまで述べたように、スラム・クリアランスから現在のスラム改善事業へと変遷してきているが、このような住宅政策の変化をもたらした要因として、居住者自身の力を見出すわけにはいかないであろう。タイの文化的風土は役人などの上位の人間に対しては受動的にふるまうと言われてきたが、生活の存在基盤である住居の追い立てについては、強い抵抗が示されてきた。また、改善事業の対象地区として自分たちの居住している地区を採択してもらえるように陳情したり、電気や給水設備の改善を求めたりするなど、とりわけ居住者の組織化が成功している地区では、居住者の積極的な対応がみられた。

そして、居住者自身の力を強化する鍵となる住民の組織化とリーダーの育成のために様々な支援が政府や国連機関、NGO等によって意図的に合わせて行われてきている。居住者自身の力の高まり、政治的な地位の向上を背景として居住政策はこれまで述べてきたように変化してきている。

居住分野の国際協力

欧米諸国の住宅事業援助

住宅分野の援助が国際協力場で開始されたのは、それほど古い話ではなく、本格的には1970年代に入ってからのことである。世界銀行を初めとして欧米諸国もそれまでは、生産活動に直接に関係するような経済的分野での援助が中心であった。国全体の経済成長を高めれば、貧困の問題も自然に解決されると考えたのである。

しかし、開発途上国への資金援助の大幅な増加等により、確かに高い経済成長率が60年代に達成されたが、これらの経済援助が開発途上国の所得格差をむしろ増大させ、貧困層の生活向上に真に結びつくものではなかった。そのため70年代には経済成長と同時に社会的公正の達成が開発援助の目標として掲げられ、低所得層の基本的生活向上のための直接の

援助が強調されるようになった。住宅分野の援助に次第に力を入れるようになってきたのは、このような背景があった。

欧米諸国では、様々な国が開発途上国の住宅事業に援助を行っている。アメリカやイギリス、ベルギーなどは開発途上国の貧困層を対象とした住宅事業（スラム改善事業、サイト・アンド・サービス事業等）に直接の資金援助を行っており、世界銀行、アジア開発銀行なども事業融資を行っている。さらに、市民活動のレベルでも、開発途上国の貧困層の住宅問題に関心をもち現地で援助活動が続けている市民団体など（NGO）が欧米には数多く存在している。

また、欧米諸国では、開発途上国における住宅問題の重大性に着目して、様々な研究をこれまでに実施してきている。例えば、カナダの国際開発研究センター（IDRC）は開発途上国の住宅問題についての意欲的な研究をこれまで行ってきており、多くの優れた研究報告書を発行している。また、IDRCはタイで1975年に住宅総合研究の援助を行い、その後のタイでの住宅研究の基礎を築いている。オランダの住宅研究所（IHS）では、開発途上国の研修生を対象に年間2回、5カ月間の住宅研修コースを開催している。また、IHSはバンコクで1970年と1976年に住宅調査を実施したり、1980年にタイの住宅公団と共同でスラム改善事業とサイト・アンド・サービス



改善事業が未着手のスラム。
板敷の歩道、ゴムホースによる水道が見える。
カメやドラム缶は水を貯えるための必需品。



スラム改善事業により歩道、排水、電気が整備。

事業の集中研修を行い、1981年にはアジア工科大学を加えた3者の共催でサイト・アンド・サービス事業の国際セミナー（アジアの5カ国が参加）を開催している。

立ち遅れている日本の援助

これに対して、日本は住宅分野での開発援助を、これまであまり行っていない。国際協力事業団が開発途上国の行政担当者等を対象として住宅研修を行ったり、日本の住宅専門家を開発途上国に小数派遣している程度であり、他の分野での日本の援助実績に比べると著しく見劣りがする。

日本の住宅分野での援助がこれまで弱かった理由は、一つには、日本企業への利益の還元が期待できないということがあろう。工業化住宅のようなものを建設するならば日本の製品を利用できるであろうが、かつて、西欧諸国の援助で建設されたこの種の中層住宅は、低価格住宅と名前が付けられていたにもかかわらず、開発途上国では中・高所得者向け住宅になってしまい、主要な住宅事業としては不適当なことが明らかになっている。

住宅分野での援助が弱い第二の理由は、数多くの貧困層に便益が行き渡るようにするために、現地の材料を使い、居住者の労働力を利用するなどして、住宅価格を出来るだけ低くする工夫する必要がある、また、入居者の生活様式を熟知して、ニーズにあった住宅を建設していかなければならない等の住宅分野の援助の難しさである。

住宅はまた、単体として建設すればすむものではなく、水道や電気、道路、学校など、更には雇用の場まで一体として整備しなければならないという関連分野の広がりがある。さらに、開発途上国の住宅問題は、アジア、アフリカ、南米という地理的な違い、所得水準や都市化の程度、社会的条件や歴史的条件により大きく異なる。各国の状況を正確に把握した上で、どのような対応策が必要かを見極めなければならない。

日本には現在、残念ながらこの様な開発途上国の住宅問題についての十分な知識がない。開発援助の対象分野ではないこともあって、開発途上国の住宅問題の研究について日本ではこれまでほとんど行われてこなかった。研究テーマの一つとして開発途上国の住宅問題を研究している者は小数あるが、この分野での委託研究が少ないことなどから、開発途上国の住宅問題を専門としている日本の研究者は、育

っていない。

日本が住宅分野の援助を十分に行っていないことについて、今のところは幸いに表だった世界の批判を耳にすることはない。日本の政府開発援助については、経済的国益追求（贈与分が少ない、ひも付き援助が多い）等の世界の批判があるが、日本は、これらを次第に改善していくのは当然のこととして、同時に、援助本来の目的である開発途上国の貧困層の生活向上に結び付く、住宅のような分野での援助を増加していく必要がある。

当面は、事業内容も十分に研究しないままに稚拙で早急な資金援助の増額を図るのではなく、開発途上国の住宅問題に関して組織的に研究を深め、問題把握につながる開発途上国の住宅調査や現地での住宅研修、実験的な住宅事業への資金協力など、援助の質を高める努力をしていくべきであろう。

JVCの居住分野での活動に対する期待

開発途上国の居住問題の改善のために、数多くのNGOが現在、活発な活動を展開している。世界各国のNGOによるスラム改善運動の現場を歩き回って、情報交流を続けているホルヘ・アンソレーナ氏は、『スラム民衆生活誌—アジア・ラテンアメリカの貧困—』（1984年、明石書店）や『居住へのたたかい—アジアのスラムコミュニティから—』（1987年、同）の中で各国NGOの貴重な運動経験をまとめている。また伊勢崎賢治氏は『インド・スラム・レポート』（1987年、同）の中でボンベイにある40万人のスラム居住者がいるといわれるダラビに三年間にわたって住み込みながら、NGOのコミュニティ・リーダーとして活動した際の体験をまとめている。

JVCでは、バンコク最大のスラムであるクロントイなどのいくつかの地区で、奨学金の支給、図書館活動、保育所の建設などを行っているが、居住関連の活動としては、スラムの移転の際に、建築材料の貸与や立ちのき問題の相談を行ってきた。

私が初めてクロントイを訪れたのは、1984年秋であったが、当時、JVCの担当は加藤哲也氏で、1日かけてクロントイ地区とその周辺を案内してもらった。87年春にバンコクの調査に行った際は、クロントイ担当者は佐藤正喜氏で、JVCがつながりを持つ他のNGOの居住関連の活動を含めて案内してもらった。その2回の際に感じたのは、居住問題に関心

を持つ私の目からすると、なぜ、JVCの他の活動に比べて、このクロントイ等の地域開発活動の規模が小さいのかということである。アフリカの食料問題、タイの難民活動などでマスコミを動かし、大々的に活動しているのと比較すると、余りにも居住問題は小さく扱われ過ぎているように感じた。

タイにおける地域開発活動を紹介するために、86年8月から発行された「タイCDニュース」(現在は『ブアン』)の第1号で、村田恵子さんはタイCDチームに参加したいという日本人ボランティアが少ないことを残念であると述べている。また、かつて、加藤、佐藤両氏から、この活動にはなかなか資金が集まらないとも聞いている。JVCの事業予算を見ても、主要ないくつかの活動の予算と比べてタイ地域開発は数分の1以下の予算規模となっている。

政府レベルでの居住分野の国際協力が、日本では十分にこれまで行われてきていない理由については、すでに説明した通りであるが、NGOの場合も同様な理由が存在すると考えるのは無理がある。おそらく、JVCの中でタイ地域開発のスラム関連の活動がそれほど大きく扱われていないのは、開発途上国の居住問題が日本人にとって分かりにくいためのものであろう。

しかし、開発途上国の居住問題は今後、日本でも大きく取り上げなければならない課題であり、国連の国際居住年の活動方針の中に書いてあるように2000年までの居住問題の解決に向けて日本政府も関連のODAを増やすことが期待されている。そして、この際に居住者との間に立って、本当に援助を必要とする人々に日本のODAを仲介する存在として、JVCが一定の役割を果たすことができるのではないかな。

政府とスラム居住者との間に立って、NGOが有効な活動を続けている例は、すでにいくつも報告されている。タイでは住宅公団とスラム住民の間にあって、多くのNGOが活発な活動を展開して、公団、スラム住民の双方から感謝されている。スリランカ、インドでも同様の成功例が知られている。一人一人の居住者に細かく対応して行くには、政府レベルの活動では無理があり、コミュニティとのつながりを持ったNGOとの役割分担が不可欠であることは、国連、各国政府ともが認めるところとなっている。

日本の場合には、まだ、居住分野のそのような援助経験はないが、JVCがこのような活動を担えるNGOの一つになれる可能性は大きい。JVCはこれまでに何年にもわたって、タイのスラムで活動を続

けてきており、貴重な経験の蓄積を持っていると思われるからだ。

しかし、本格的に居住分野の活動をJVCが展開して行くためには、スタッフの社会・地域開発に関する知識がさらに必要となるであろう。私の知っている範囲でも、開発途上国の居住問題に関心を持ち、将来の就職の見通しがはっきりしないにもかかわらず、研究を始めている若い人々が何人かいる。日本国内では現在、この分野の専門的知識を習得できる大学がほとんどないため、海外の大学に留学しているケースもある。このような教育を受けたり、開発途上国の居住問題の研究している人々の中には、国連や政府機関などの専門家としてよりもNGOの一員として現地に入り込んで活動をしたいと考えている若い人もいる。

おそらく、この際に問題になるのは、スタッフの給与等の待遇であろう。私の聞いた限りでは、タイにおけるJVCの日本人スタッフの給与も、タイ人と同じ生活ができる範囲ということで、国際協力事業団(JICA)の専門家の30分の1程度であった。自費でタイ語の語学学校に通う際の費用も大変の様な話を聞いて、考えさせられてしまった。

西欧では、政府開発援助(ODA)のかかなりの割合をNGOに振り分けて使っているが、日本のNGOも政府資金をもっと積極的に受け入れて財政基盤を確立し、専門的活動を展開しても良い時期に来ているのではないかな。JVCの内部では、ODAの導入について、慎重な意見があるように聞いているが、運営の自立性を確保したまま、ODAを利用することが十分可能のように思われる。居住分野で活動する日本でのNGOの第一人者として、JVCの今後の活躍を期待したい。

* * *

(本稿は、編集者より標記のタイトルで執筆を依頼されてまとめたものであるが、筆者は開発途上国の居住問題について3年間の文献研究をした経験があるに過ぎず、開発途上国での生活経験もなく、NGOの活動の現場も十分には知らない。JVCの期待については、誤った指摘も含まれているかも知れないが、議論のたたき台として参考にいただければ幸いです)

私とスラムの226日

元タイ地域開発チーム

柴田 久寿子

海外での活動を主とするJVCの中であって、4年近く国内で定住難民に関わってきた私にとって、今回の海外での仕事は、言葉や文化の障害に私自身が直面する良い機会であり、スタッフになってからの初めての海外経験であった。本来ならまだバンコクにいた予定であったが、体調を崩した事で帰国することとなった。わずか7カ月ほどの滞在なので、勘違いや誤解もあるだろうが、私なりのバンコクでの体験を語りたいと思う。

おしっこにドボン！

午後1時ともなると暑さがじりじりと迫ってくる。地域開発チームは、事務所を住宅街から、バンコクいち大きいクロントイスラムへ、8月初旬移転させた。

正面には港湾をひかえている。そのせいかクロントイ一帯は湿地帯であり、トタンやベニヤなどで建てられた家々は、沼地に浮かぶようにして、所狭しと建ち並んでいる。その間を2年程前に、板からコンクリートに補修された通路が、碁盤の目の様に整然と走っている。

私たち、地域開発チームの事務所は、後方に密集して建つ家々とは違って、幸いなことに周囲に家がない。高床式の事務所は沼地でお堀りの様に囲まれ、そこにコンクリート通路が通っている。図書館建設の際、人夫の力で何とかなるだろうと建てた支柱がずぶずぶとはまりこんでしまい、機械で支柱を埋めこむしかなかった。水深約6mである。

この沼地は、みんなの良き投棄場になっており、ふん尿から、プラスチック、ダンボール、くさりかけた木材、残飯、生活用水まで、ありとあらゆるものがある。沼は、ふだんは、真っ黒に静まりかえり、水面はゴミの間に藻を茂らせている。見た目には水深1mくらいである。しかし、ひとたび何かの拍子にかき混ぜられたりすると、鼻が曲がるという言葉通り、息もつけなくなる。

私たちの建物は1階が図書館、2階に事務所と集会室がある。図書館は、その名の通りの機能も果た

すが、朝から、小さな弟や妹を連れて遊びにくる子供たちの格好の遊び場でもある。2階は冷房なしでも港からの風で涼しく（西陽と、時おり誰かがひっくり返して悪臭を放つ風が入ってこない以外は）快適である。

引っ越して、すぐクロントイにある自治会や子供たちと協力して、図書館の周囲にびっしり浮いていたゴミの掃除を行った。この掃除の後、執ような水虫に悩まされたが、そのかいあって、水面は透明な水をたたえるようになった。

ところがである。昼すぎになると、バシャバシャと水をたたく音が聞こえた。見ると子供たちが泳いでいる。すっぱんぼんの者、パンツ一丁の者、服を着たまの者。水面には、泥が舞いあがってきて、みるみる真っ黒になる。そして一番恐れていた悪臭が漂い出す。子供たちは泥にもぐりこんだり、発泡スチロールの船に乗かったりしてひと遊びすると、臭いのしみついたままの体をコンクリートの通路で甲ら干ししてひと休み。その間を、物売りや、大人が行き交うが、みんな何でもないかのように通りすぎる。しばらくすると、子供たちは、おもむろに立ちあがって、水面に向かって立ちしょんを始める。そして、その立ちしょんをした水面にドボンと飛びこむのである。

いくら暑いとはいえ、日本ではそのへんの下水に飛びこんで泳ぐ人はいないだろう。

うえ。たまらん、汚ない、臭い、と思いながら、楽しそうに泳ぐ子供をみていると、泳ぎを止めるのも気がひける。

しかし、ある日、とうとう、衛生上よくありませんというお達しがどこからかきて、泳ぐ子はいなくなった。

時々、泳いでいる子をみかけると、「こらっ、そこで泳いだらおちんちんがはれるぞ！学校はどうした。さばりか、お母さんに言いつけるぞ」と、言うかどうか正確に訳せないが、私たちのスタッフが、注意していた。

これで、子供の楽しみはひとつ消えてしまった。

衛生的には問題があるかもしれないが、このくらいたくましいほうがいいじゃない、と内心思っていた私は、ちょっぴり残念であった。

そののち、図書館の堀に水輪ができるようになった。変だなあ、と思って水面と図書館の床との間をコンクリートの通路からかがんで見ると、子供たちが発泡スチロールに乗って床下で遊んでいる。

驚くやら、あきれるやら——この後、これを知って怒ったスタッフと子供たちの、いたちごっこが行われたのは、いうまでもない。

お金か、時間か

バンコクには1020近くのスラムがあり、100世帯くらいのこじんまりしたものから、クロントイスラムの様に人口3万～4万といわれるものまで様々である。その中から約30地区を対象に奨学金や移動図書館活動を行っている。

スラムの窮乏もさることながら、我がチームの金の無さも負けず劣らずである。資金作りのためにバザーを時々行う。バザーの品物は、在タイしていた日本人が帰国する時に置いていく中古衣料である。

バザーの目的は、我チームの資金作りもあるが、スラム住民から資金貸しつけや借金の申し込みがあった時にも、即、金を出すのではなく、金を自分たちで作るという事を大切にしているので、そのためのバザーも行う。

11月中旬、バンコクの外れにあるソイセーナースラム（約600世帯）の自治会から連絡が入る。立ち退きで、200世帯が追い出された。子供たちも立ち退きのため少なくなり、託児所の経営が難しくなった、何とか協力してくれないか、というものだった。

この託児所は運営費、先生の給料、子供の食事、おやつ代など、半分は公の機関から援助をうけているが、半分は自分たちスラムコミュニティの共益金と、預かった子供の親から受け取る1日3パーツ（18円）～5パーツ（30円）の食事代から成り立っている。今回の立ち退きで、共益金が立ち退き者のために使われ、子供も減り、経営が苦しくなったというものだった。

自治会としては、自分たちで何とか建て直すので、おやつ代、ミルク代などの経費だけでも、面倒をみてくれないかと言ってきた。要求してきた額は1カ月400パーツ（約2400円）で3カ月分だった。その後は、状況が好転すれば打ち切りというものだった。

私たちスタッフもひとりひとり仕事を抱えて手い

っぱいのなか、この様な突発的なものに対応が遅れてしまうことがある。今回は、どう対応したらいいか。私たちチームの中で意見が分れた。

「たいした額じゃないし、あげればいい。それに今から、新たなお金をバザーなどで作る時間がない」

「ここでお金をあげたら、ただの金をあげる団体になってしまう。額は小さくても、自治会に自分たちでお金を作らせよう」

話しあいをもたれた時は、期限の2日前だった。各々に仕事の予定が入り、わざわざバザーの準備をして、ソイセナーに出かけていくのは、考えただけでも手間がかかりそうだった。私も迷った。

自分たちで問題を解決する。私たちも共に参加して、共に解決する。これは人と人との関係でも、私たちの活動でも重要なことだ。でも自治会も頑張っていて、建て直そうとしているし、このくらいの額ならあげてもいいし、貸しつけても大したことない。

でも、それでは、金を持つてゐる者がただボーと金をあげただけのことだ。そんな関係を作りたいのか。否だ。

額の問題じゃあない。一緒に苦労して、金を作りだすことの方が、きっとお互いのためになる。ケチだと言われてもいい。本当のケチなら、お金が生き生きと大切に使われる方がいいに決まっている。

自治会だって、こじきじゃない。物乞いをしてゐるわけではない。

これだけに1時間かけて話しあい、出た結論は、「あさって自治会と協力してバザーを行う」ということだった。

みんな、明日は朝からバザーの準備だ。

寄ってらっしゃい、みてらっしゃい

バザー当日、私は3カ月ぶりにソイセナーを訪れた。以前来た時の、細い路がくねくね走っていたスラムの面影はなく、大通りに面した託児所と数軒の家を残して、後はがれきと化していた。立ち退きにあった場所だけ、ぽっかりと穴があいたようになって、その他の家はその穴を取り囲むように、奥の方向に立っている。テレビでしか見たことのない戦後の焼け野原とそっくりだった。あまりの変わりように、しばし茫然とした。

午後1時、自治会役員の家玄関にある大きな木の陰で、ダンボールにつめられた衣類が地面に敷かれたゴザにぶちまけられ、バザー開始。1枚5パーツ（30円）から30パーツ（180円）まで、おむつ、

ワンピース、背広にいたるまで、ありとあらゆるものがある。

拡声器で「安いよ、バザーだよ、みんな買いにきてくれ、売りあげは託児所のために使われるんだ。さあ、来てくれ」と宣伝すると、やってくる、やってくる、老若男女。木陰とはいえ、人だかりで、暑さは募る一方。

スラム住民は、お金持ちではないが、小金持ちである。5 パーツ（30円）の子供服はバカ売れ。日本で買ったなら、ん千円いや、ん万円なんて、ワンピースや背広をみると、つい計算してしまう。

おばさん連中は、すてきなスカートがあると、これ、着れるかねと私の前につきだす。サロンを巻いた腰にスカートを試着すると、よく肥えた肉がむっちりとび出してしまう。あと1cm、いや2cmかな、このベルトの部分だけ、つぎたせば着れるのに—とおばさんは、一所懸命、私に説明して買おうとするが、もうすでに腰のまわりのギャザーはのびきっている。

残念そうな顔をするおばさんに、すかさず違うスカートをさしだして、「これ、これなんか絶対、お似あい、ちゃんと着れます」などと言って売りつけるのも大切な仕事である。

10パーツ（60円）コーナーで、男の人がピンクのワンピースを着てみんなを笑わせている。子供たちも、やや大きめの服を買ってもらって、おおはしゃぎ。「これもほしい、あれもほしい」とつい調子にのって、親にしかられている。

さあ、寄ってらっしゃい、みてらっしゃい。安いよ、安いよ、その日の収益、2600パーツ（1万5600円）は全てソイセナー自治会へ寄附された。スタッフ共々、ごころうさん。

私が、関わった意味

ラップレースラムは、約400世帯で、閑静な高級住宅街の外れに、びっしり家が建っている。ラップレーの自治会のおじさんは、私が行くたびに、「日本にはスラムがあるか、大きいか、みんな家はあるのか、仕事は何をしているのか」質問責めである。彼は夫婦で市場で野菜を売りながら生計を立てている。

貧しいながらも広くて、清潔な家である。自分たちで、建築現場の木材をひろってきて勝手に家を建てられるので、12畳分くらいの部屋は、すぐできる。ここは、部屋の一角を子供図書館にして、私たちの活動に協力してくれている。

日本には、山谷、釜ヶ崎、寿町とあるが単身者が多い。人数も少ないせいか、どうしても影が薄い。その点、日本を除くアジア諸国は、スラム人口が100万、200万単位で、しかも家族総出ときているから、圧倒的に経済や政治に影響をもつ。バンコクでも政治家は、自分の名前を削った図書館や託児所を作るのが趣味である。

ところで、ラップレーのおじさんは、自分のことより日本のスラムのことを心配しだした。家族がいなければ淋しいだろう。家もないのか。困るだろうなあ。政府や自治体は何をしてるんだ、仕事はあるのか。

すべての質問に答えられるだけの知識がない私は、適当にお茶を濁してしまった。

だけど驚いたのは、おじさんが、日本のスラムに関心をもち、我が事のように心配してくれたことだ。自分だって、問題が山積みしているのに。

日本にいて、タイのスラムのことを心配している人は、何人いるだろうか？ タイがどこにあるか知ってる人ですら、どのくらいいるだろうか？

ラップレーのおじさんにとっては、日本はすごく身近なのだ。それは、私たちの活動を通してかもしれないし、巷にあふれる日本製品のせいかもしれない。それにしても、日本に帰って、タイが近いなどと感じることはほとんどない。遠い国、タイ（飛行機で4時間50分、東京⇄大分より近いのに）。居る場所が違うだけでこんなにも心の距離がある。

短い間に、私にできたことがあったとしたら、タイのこと、タイの人のことを自分の問題として考えるようになったことぐらいだろう。

こんな私を快く受け入れたタイとタイの人に、お礼を言いたい。コップンカー（ありがとう）。



日本からの訪問者と（左から4番目が筆者）

ก้อนเมฆ (雲)

コーンメーク

子供たちのための機関誌

奨学金担当のリーラが、対象となっている子供たちに向けて『コーンメーク(雲)』という小冊子を作っている。タイではもうそろそろ第2号が発行されるころだが、8月に発行された第1号をちょっとのぞいてみよう。

—— みんな こんにちは。『コーンメーク』という名前の冊子を紹介します。『コーンメーク』は、奨学生みんな一人一人のことが、メーウおねえさんは大好きで気がかりだということをみなさんに伝えるために、2カ月に1度おねえさんが作る冊子です。

みんなが自分で考えてみるコーナーや、みんなが書いて送ってくれるいろんなお話のコーナーも作ります。誰のお話でも次の『コーンメーク』から載せます。

—— メーウおねえさんは先生から聞いているんですけど、みんなの中には時々学校をぬけ出したり、しっかり勉強しなかったり、いつも友だちをいじめてばかりいる子がいるそうですね。おねえさんはそれが誰なのかは言いたくありません。本人は自分でどうすればよいのかよくわかっていると思いますから、早く自分で悪いところは直して下さいね。

みんなは知っていますか。勉強がしたくてもする機会のない子供たちがたくさんいるのです。みんなはそんな子供たちよりもずっと恵まれています。だから勉強できる機会がある時にはいっしょうけんめいに勉強しましょうね。

<私は言いたい>

あたりまえのことだけど、時々まわりのいろんなことに不満を感じることがあるでしょう。もしみんなが何か不満に思っていたら、メーウおねえさんに書いて聞かせて下さいね。誰のお話でも『コーンメーク』に載せます。そしてほんのささやかだけれども、お礼の賞品を受けとってね。

今回は第1回目です。わたしたちのお友だちが何を言おうとしているのかよく読んでみて下さいね。

「私はぜんぜんわかりません。どうして人間はお

酒を飲んだり麻薬を打ったりするのでしょうか。こうしたものは命にもかかわる習慣性の薬です。お酒だって同じで飲み過ぎれば理性を失います。酔っぱらって他人に迷惑ばかりかける人もいます。私はお金をためて、ごはんやお菓子を買って食べる方がよっぽど良いと思います。」

(ゲーちゃん、小学2年生、女)

「どうして人間は木を切って森を破壊するのでしょうか。もし木を切ってしまうと、雨がたくさん降ってきた時に洪水が起きるし、雨期になっても雨が降らなくなってしまうのを知っていますか。あーあ。苦しい思いをするのはいつも農民です。雨が降らなければお米は作れない。そうしたらどこにお米を求めればいいのですか。」

(チップちゃん、小学6年生、女)

<お友だちとの1分間>

『コーンメーク』創刊号の今回、メーウおねえさんはみんなに、ウタイタラート寺学校小学2年生の女の子のガーロン・テンガーム、通称グンちゃんを紹介したいと思います。

—— グンちゃんは今何が1番ほしいですか。

グン 鉛筆がほしいです。ほかのものはほしくありません。特に先の丸くなった鉛筆が大好きです。それだときれいな字が書けるからです。

—— 大きくなったらどんな仕事をしたいですか。

グン 先生になって子供に勉強を教えたいです。

—— 家ではどんなお手伝いをしていますか。

グン 毎日おとうさんの寝床のかやをつるのが仕事です。今は自分の服の洗濯もできるようになりました。

—— お友だちみんなに何か言いたいことはありますか。

グン みんなどこかで私に会ったら、「こんにちは」って言って下さいね。

このほかにも『金貨の袋』という物語や、クイズなど盛り沢山。全部をタイ語から日本語に翻訳して下さった森千也さん、どうもごろうさまでした。

コメンからの手紙

——農村開発の開始



▲村の小学校



バン・Mの農家▶

タイ地域開発事業担当

岩崎 美佐子

お元気ですか。日本の気候はいかがですか。タイでは今、冷たい風が、とくに田舎では強く吹いています。

11月の初め、私は農村開発活動の最終的な調査のために、ブリラム県、A郡、タンボン・M（タンボンは村の集合体の意）で1カ月近くを過ごしました。最初に、私の友だちの友だちが小学校の校長をしている村、バン・M（バン＝ムーバーン、行政組織の末端単位、ひとつのまとまりを示す村落、日本で言えば村にあたる）を訪れましたが、ここでは短期間のうちに村長や村民と、とてもいい関係を持つことができました。また、タンボンの委員会と連絡をとり、タンボン内のほとんどのムーバーンを訪ねることができました。

タンボン・Mには12のムーバーンがありますが、どのムーバーンも貧しく、電気のないムーバーンもあります。村落を結ぶ道はありますが、もちろん舗装しているわけではなく、なんとか道と呼べるようなしろものです。彼らのほとんどは専業農民で、主に米を生産しています。換金作物として麻、砂糖キビ、キャッサバなどを少々栽培しているほかには、自家用野菜が少し、あと、自家用織物生産のために桑を植え、蚕を飼っています。

彼らの抱えている問題は、乾期の飲料水不足、稲作のための降水量不足、低収入、借金、そして新しく獲得するものが何もないのに、彼らのすばらしい伝統や文化が失われつつあることなどです。

私は、12のムーバーンのうち、バン・Mとバン・Nにもっともひかれ、この2つのムーバーンを集中的に調査しました。

バン・M

まずは、たいへん貧しい村であることをお伝えします。タンボン・Mは郡庁からは一番遠い位置にあり、行政の恩恵にはほとんど浴していませんが（したがって干渉も少ないのですが）、バン・Mも例外ではありません。

農村開発は、村民の自主的、積極的な参加が成功の最大の要素ですが、バン・Mでは村民間の関係がとていいので、おおいに期待できます。また、村落の指導者的な人々である村長、小学校の校長、すべての教師などはお互いにいい関係にあり、みんな生活の向上に興味をもっています。教師たちは、かつて彼ら自身の手で共同菜園や給食活動などを試みたこともあるのですが、経験と広い視野に欠けており、成果をあげられないでいました。

村民は、私のようなよそ者にも非常に友好的な人たちなので、活動地としてはうってつけです。彼らはJVCに自分たちの村にきてくれるよう、心から望んでいます。

バン・Mで活動することの利点のひとつに、バン・Mが近隣一帯に古いムーバーンとしてよく知られており、他のムーバーンの母村であったことから、ここでの開発は、他のムーバーンに波及しやすく、足掛かりとするには最適の村であるということもあります。バン・Mには、まだ古い文化や伝統が保持されており、これらを奨励するのも意味のあることと考えます。

村落の規模は、130戸と、大き過ぎも小さ過ぎもせず、ちょうど手頃です。

バン・N

バン・Nはタンボン・M内で最も貧しいムーバーンです。村民のほとんどは土地なし農民で、農業労働者として働いており、たくさんの農民が村落をあとにして、コーラートや他の地方に働きに行っています。リーダー格で、尊敬を集めている人もいますが、村落内にある2つの寺のうち、瞑想寺の僧には問題があるようです。出家する前（タイでは、男であれば誰でも簡単に出家したり還俗したりできる）に何か争いがあったようで、村長と犬猿の仲というありさまで。また、出稼ぎの人たちが多いため、実際に活動を始めたとき、村作りに参加できる人たちが限られるであろうなど、問題は多いのですが、それもこれも根本の原因は貧困にあり、このような村で、一朝一夕に成果を上げようというのは無理な相談なので、ゆっくりやっていく以外ありません。戸数は約60戸です。

バン・Nには、いまだに動力を使った精米機が一台も無いのは驚きでした。今ではほとんどの村から臼は消えてしまったのに、ここでは毎朝、各家庭から臼で米を搗く音が響いてきます。

村落の決定と活動の開始

さて、私は数カ月にわたってチャチュンサオ県、ブリラム県などの村落を調査してきましたが、最終的に、上記のブリラム県のバン・Mとバン・Nを、JVCの活動地として決定したいと思います。東北タイには多かれ少なかれ、問題を抱えている村が多いのですが、上記の2つのムーバーンに決定しようとする主な理由は、とくにバン・Mで、将来にわたって村のリーダーとなっていけるような人たちと出会ったことにあります。いずれ、私が引くときがきますから、そのあと村民にどのように引き継いでいけるかが、何といてもプロジェクトの成否の鍵ですからね。

まずは、波及効果の大きいバン・Mで活動を開始し、真のターゲットをバン・Nにおきたいと考えています。

活動は、村民の意見を聞きながら1年の計画をたてるところから始めるつもりですが、手始めとしては、もう一度、村民をも巻き込んだ給食プロジェクトから始めていくのが一番いいのではないかと思います。学校に菜園を作り、子供たちに給食用の野菜を栽培させると同時に、鶏を飼い、共同労働で今ある池を深くして魚を養殖、また蛙の養殖もでき

れば、家ではトウガラシ味噌とご飯だけの食事しかできない子供たちも、とにかく一日一食はビタミンや蛋白質などの栄養を確保することができます。生徒数は、3年前に分村したバン・Bからの子供たちも含めて、約170人です。

バン・Mには公共耕作地がありますので、ここで有機農業を実施し、薬草など伝統作物を見直すとともに、他の野菜に豆類を混植するなど、土壌作りからいろいろやってみるつもりです。また、各家庭において、豚、鶏など家畜の飼育や、魚の養殖、果樹の栽培などを盛んにし、家族全体の栄養向上をめざしたいと考えています。労働交換など、彼らが伝統的に獲得していたシステムを、農村開発活動にどのようにいかせるかが私の課題です。

これはまだまだ先のことですが、農民たちのスタンディーツアーもそのうち行いたいと考えています。以前、訪問したクワ先生の多角農場とか、ロンパオナーン師のいるバン・ターサワンもきっと彼らのいい参考になるでしょう。

そして水確保のため、池や用水路の整備にいずれは手を付けることになると思います。

ではまたお便りします。

* * *

JVCの農村開発活動の調査がやっと煮詰まってきた。痩せた土、水利の悪さ、現金収入のなさなどから、東北タイで最も可能性の高いのは、水利の整備とともに有機農業の充実とコメンは考えている。幸い、水牛や鶏の糞は容易に手に入る。コメンは愛媛の福岡正信氏の自然農法に関する著書や、どこで手にいれたのか、日本のテレビで放映された埼玉の菅和男氏の有機農業の、ダビングにダビングを重ねて画面がぼやけきっているビデオなどを見ては研究しているので、一度は日本に招待していろいろ訪問させてあげたいと考えている。

しかし、ご承知のように、日本国内の移動は、英語があまり得意ではないコメン+1名の交通費、宿泊費を考えると、かなりの額に上りそうで途方に暮れてしまう。どなたかこれはと思う農業をやっている方をご紹介くださるとともに、お宿を引き受けてくださいませんか。よろしく願いいたします。

CD(地域開発)チーム、最近の報告書から

図書館活動 — ローイカトーンの日

1987年11月5日、満月の夜、クロントイ図書館では、スラムの子供たちを集めてローイカトーンのお祭りをやった。ローイカトーンとは、日本で言うとお盆に行く精霊流しのような行事で、蓮の花を形どった燈ろう(カトーン)に、ろうそくや線香を立て、願いを込めて川に流すのである。クロントイには、きれいな川などなく、溜池のような水溜りがあるだけである。

そこも、昼間見る限りでは、真っ黒に濁った水しかない。しかし、夕闇が迫ってくれば、そんなことは問題ではない。

子供たちは手に手に3パーツ(18円)~5パーツ(30円)で買った、または、お母さんやお父さんに作ってもらった燈ろう(カトーン)をもって、図書館の前に集まってくる。

カトーンを流す前に、爆竹を鳴らし、ローイカトーンの歌を唄い、ゲームをやってムードを盛りあげる。

夜7時、たつぷりと日は暮れ、しびれを切らしていた子供たちは、我先にとカトーンのろうそくに火をつけて流そうとする。

カトーンの上には、おさい銭よろしく1パーツがのせてある。ろうそくに火をつけて流すやいなや、男の子が数人ドボンと水に飛びこみ、流れていったカトーンを追いかけて1パーツを拾い集める。花火も登場して、カトーンを流し終った子は、花火をくるくる回して遊び始める。

みんな幸福になりますように、爆竹でいたずらをしすぎませんように！



真っ黒い水も平ちゃら。この水たまりに燈ろうを浮かべる。

ミニ図書館

新しいコーディネーター、スタッフと共にミニ図書館建設予定のナンシースラムへ出かけ、住民たちと話しあいをもった。ナンシー住民委員会は、ミニ図書館の青写真を提出し、次の手順によって建築する様になった。

- 1: 建築費用のトータルは約2万5000パーツ
- 2: CDチームは、2万パーツを支援するが、現金ではなく、建築材料を買う。残り5000パーツは

ナンシー住民委員会がもつ。

- 3: 建築作業終了後、地域開発チームはミニ図書館活動に対し、本、図書館用具、文房具のためにさらに、5000パーツ支援するつもりである。
- 4: 建築作業は、約10日間、ナンシーの住民自身によって行われる。私たちは、1987年12月末の内に作業を開始することを決定した。

左は2月4日のナンシーミニ図書館。

通路(看板のある所)の右半分がJVCの図書館で、左半分はスラムのインフォメーションセンターとして使われる。ここではスラム住民の呼び出し等を行うという。

図書館はまだはめ板がなく未完成であるが、おいおい住民たちが買いそろえる。通路のかべには求人票なども張って、大人たちにも大いに利用されるように工夫をこらしている。





CDチームのオールキャスト

左から、サムライ（図書館管理、JVCに入って8年。昨年結婚）、リーラ（奨学金担当、子供が大好き）、岩崎美佐子（地域開発・事業担当）、スパチャイ（移動図書、昨年11月からJVCに参加）、コメン（農村開発、日本で研修を希望）、パティット（コーディネーター、カラワン・バンドで歌っていたこともある）。

キャンプ 1987年10月30日～11月1日（2泊3日） 場所：サラブリー県クロン寺院公園

集合時間は午前9時。子供たちは手に手に着がえをつめこんだバッグをもって、時間前に集まってきた。

7カ所のスラムから、115人の子供たち（7歳から15歳まで）が、キャンプに参加した。

前回のキャンプでは、子供たちは無料参加であったが、それでは子供の主体性を失うというので、今回は1人1日20バーツという額にし、参加費を集めることにした。出発前にお金を集めたが、「これでおいらの財布からっぽだよ」と財布をみせてくれる子供。おこづかいに手に握りしめた10バーツだけ、なんていう子供がほとんどだ。

だけど、心はキャンプへの思いでいっぱい。楽しい2泊3日の始まりだ。今回は、スラムの若者や大学のサークルのメンバーが20人近く、応援に駆けつけてくれた。

キャンプ地は、山に囲まれた平原にお寺がボツと立ち、その平原をとり囲む山の間から滝が流れ落ちていくきれいな所だ。

女の子たちは、お寺の空き部屋、男の子たちは、野原にテント住いた。

ナンシースラムからは、有志のお母さん4人が食事のお世話で参加してくれた。

子供たちは、他のスラムの子と過ごすのは初めて。最初は自分の地区だけで集まって生活していたが、遊びを通してだんだんうちとけていった。

キャンプ地の横を流れる滝は、滝つぼあり、浅瀬ありで、このうえない遊泳地である。アプナム（水浴び）も、男の子はパンツ1丁、女の子はサロンを巻いて、滝つぼにとびこむ。浅瀬ではシャンプー片

手にせせせと水浴びに励む。キャーキャー水をかけあったりして、大騒ぎである。

2日目は、朝8時から登山である。弁当をビニール袋につめて、約10km歩く。スラムでとびはねる子供たちも、ここではくたくた。放牧してある牛をみて、逃げ回ったり、蜂にさされたり、都会っ子の一面をみせてくれる。

夜のキャンプファイヤーでは、各チーム別の寸劇にみんなが笑いころげた。

夜も更けて、12時をまわる頃、キャンプファイヤーの火は消え、あたりに静けさが漂う。初めて親元を離れる子供もいて、夜になると、目が痛い、足が痛いといって起き出してスタッフを困らせた。

帰る日は、御飯を食べる間もおしんで歌・ゲームを行った。迎えのバスが遅くなって、子供の帰宅を待つお母さん方を大いに心配させてしまったが、エキサイティングな3日間を過ごし、子供たちはいろんなことを学んだであろう。



キャンプで水遊びする子供たち

タイ

サイト2での補助給食活動の 任務を譲り渡す

JVCは1988年3月末をもってサイト2での補助給食活動の任務を終了することになった。

ノルウェーの法律学者グレブ博士は、昨年9月、タイ・カンブチア国境に集結している約27万人のカンブチア人の避難地は「国際的に後援された事実上の収容所なのか？」と疑問を呈していた。8つある避難地は全て国境に近すぎ、27万人の避難民はカンブチア国内からの大砲の射程内にある。

サイト2はその中で最大の避難地である。そこに住む約16万人の避難民のほとんどはKPNLFに支配されているが、ここが開かれた1985年以前は、国境上に点在していたいくつもの難民村に別々に暮らしていた。その頃、それぞれの難民村に対して別々のボランティア団体が活動を行っており、その名残で、現在もサイト2ノースという同じ敷地の中で病院と補助給食のためにそれぞれ3つの団体が活動している。そのことが避難民同士の過当な競争とあつれきを引き起こしてきた。

最近のWHO保健使節、WFP評価使節、シールド・アジア保安コンサルタント会社のそれぞれの報告書に基づいて、UNBRO(国連国境救援機関)はサイト2ノースの病院と補助給食の活動の合理化(再編成)の計画を推進してきた。UNBROとしては国境でその傘下で活動するボランティア団体の総数を今のまま(13団体)に保ちたいため、JVCにサイト2ノース全体の補助給食の活動を1988年から任せようと起案した。昨年6月最初にその話があった時、JVCはその案に同意した。しかし、他の団体(CAREとCOERR)は総論では賛成しても、自分たちの任務をJVCに譲り渡すという各論ではその案を受諾しなかった。

タイ政府はUNBROの提案した計画に対して反対していない。一方で、何カ月か前から、タイ当局はサイト2における避難民の生命の安全を守り、人権を保護するための方策をUNBROと進んで話し合い始



めた。安全と保護とは①カンブチア国内からの攻撃、②キャンプを警備するタイ軍遊撃兵の暴行、③避難民同士のあつれきのそれぞれから、という意味である。

補助給食の活動の長期的な目標の1つはフェイジング・アウト(段階的になくなること)であることに、UNBROも他の団体も気づいている。従来3歳以下の子供を対象としていた補助給食は、1988年からは2歳以下の子供を対象とするようになった。そのような状況も鑑み、またJVC全体としてタイ・カンブチア国境での活動に適当な人材を配置できる目処が立たないため、延長された契約の切れる1988年3月末をもってこの活動の任務を終了し、それを他の団体に譲り渡すことになった。(古西 勇)

緊急食糧援助中間報告

「君たちはもうすでに多くの被災者の生命を救った」。今年の1月マーシャ村を訪れたスウェーデン援助省の調査官は、他団体に先がけて始められたJVCによる緊急食糧援助を激賞してくれた。最悪の被災地の1つコレブ地区でも87年8月に開始したFood for Workにより、栄養状況の極度の悪化、人口の移動等飢饉の深刻化を示す変化はあらわれていない。

また、この労働の結果、265kmの支道（人道）、10kmの道路建設、72カ所の湧水の保護、5kmの土壤保全施工が行われた。

被災地に隣接した地点で迅速に対応したJVCエチオピア人・日本人スタッフの努力と、支援して下さった人々の手によって為された成果である。緊急アピールに応じて下さった方々に謝意を表したい。88年1月現在331万7664円の一般募金が集まっている。

現在までのところ、コレブ地区14村、約3万人を対象に食糧を配給してきたが、その過程において次のような被災者の実状が浮きぼりにされてきた。

①村役場に住民を集め、食糧配給のためと登録をするが、ここまで出て来れない身寄りのない老人は対象者のリストからもれてしまう。また、税金や強制移住を免がれるため、村人の半数が住民登録を済ませておらず、政府は被災者の実数を把握していなかった。JVCがこの村で活動を開始しなければ、こうした自衛手段をこうじざるを得ない弱い層は、認知すらされずに置き去りにされていたであろう。また、前回の飢饉の時に孤児になり、家畜の世話をするかわりに農家に養われている子供たち、食いぶちを減らすために離縁された婦人たちの姿も目につく。

②涸渇した泉の数が増え、数少ない水場の前には朝早くから行列ができた。人々は眠る時間をさいて飲料水を確保している状況である。

③普段でも子供たちは大人の残り物を食べている状態だが、既存の食生活の中ではそれなりに栄養のバランスを保ってきた。だが、配給食料は小麦・食用油のみであり、状況が長びけば障害をおこしやすくなる。現にビタミンAの不足によると思われる目の疾病が発生し始めた。

災害の予防を

87年大雨期の雨不足に端を発した干ばつは12月～



このようなことを2度とくり返してはならない。

1月の収穫に大打撃を加え、少なくともエチオピア全人口の1/8が被災地に住むと言われている。JVCが活動を続けるウォロ州マクデラ郡でも87年大雨期の降雨は例年の1/3だった。その結果、収穫量は低地で例年の10%、高地で30%以下であり、6万8000人が食糧不足に陥っている。被災地の農作物の90%が大雨期（6月末から9月）に依存しているため、たとえ88年の大雨期に十分な降雨がみられたとしても、収穫期までの約1年間は食糧自給の見込みはない。一年間の供給必要食糧は全土で100万トン、マクデラ郡で5000トンである。

しかしながら今回の干ばつに対しては海外からの救援団体・国連・エチオピア政府がそれぞれの担当地区で87年9月以降、迅速な対応を始めており、一丸となって飢饉そのものを未然に防ごうとしている。雨不足、作柄不良、それにとまなう市場価格の変動、人口の移動等飢饉の兆候をいち早くキャッチし、被災地の調査を行い、食糧配給計画をたてる。その計画に従い、食糧・輸送力・倉庫を確保し、被災地に可能な限り近い地点で食糧を配る。配給のやり方も道作り等村の基盤作りのための労働報酬として配るFood For Workを優先し、体力の弱い層に対してのみ無償配給を行う。緊急医療を行うのは最後の段階で、その必要性が生じた時点では多くの人々が飢死を免れ得ない。海外から食糧・輸送・配給に関わる経費さえ集まれば、人類初の災害予防の総合的取り組みは成功を収めるであろう。

今後の活動

JVCは、実情を調査しつつ、よりきめの細かいやり方で、6万8000人の被災者に対する活動を今後一年間継続してゆく。特に子供・老人等置き去りにされやすい人々に必要な栄養源が行き届くよう努力してゆきたい。また、水不足の問題に対しては、浅井戸等新たな水場を確保してゆくつもりである。

年間総予算1億3000万円、皆さんの御協力により、食糧の確保が進み、悪路を耐え得る2台のトラックの発注を終えた。だが、まだ3000万円の経費が不足している。

（林 達雄）

曹洞宗ボランティア会 (S V A)

〒170 東京都豊島区巣鴨 1-28-5
ヒカリビル201号
TEL 03 (945) 0981

NGOを訪ねて

巣鴨駅から歩いてたった2分。本当に近い。湯島にある某事務所もこれくらい近ければなあ、と思ってしまった。曹洞宗ボランティア会(SVA)東京本部は線路に近いビルの2階にある。そこで、会の事務局長である有馬さんにSVAのスラムにおける活動を中心にお話を伺った。

SVAは1979年のインドシナ難民発生にともなって設立された、曹洞宗東南アジア難民救済会議を前身としている。曹洞宗という名前からして宗教団体の一部ではないかと思うかもしれない。歴史的経緯からみると初期は関係あったようだが、現在は組織的にはまったく拘束されておらず、補助金もつけられていない。しかし精神的な面では、ある程度影響を受けているようだ。スタッフの中には曹洞宗という名前を消して宗教的イメージをなくしたらという人もいたが、「ボランタリズムに謙虚」であるために、あえて宗教的イメージの名前にしていると言う。

タイにおけるSVAの活動は、主に難民が自立することを目的とした、図書館活動、図書出版活動等を中心とした教育・文化面に関する支援を行っている。このような活動をしている理由の1つには、日本のNGOが欧米と比べて難民救援に出遅れたため、小さなプロジェクトしか残っていなかったということもあるが、SVA自体の方針として、「小さくても安定したプロジェクト」を心がけているためでもある。したがってその予算の70%は自己財源である。

SVAはタイのスラムにおいても図書館運営などを行っているが、スラムでの活動については慎重のようで、「こうあるべきだと、予見をもってのぞむべきでない」と有馬さんは言う。難民の場合は100%援助がなくては生きていけないが、スラムに住んでいる人は自分たちで生活しているからだ。また、スラムの人たちの悩みや問題点を同時体験するのは不可能で、スラムという状態を1つの概念で捕えること

自体も誤りとも言う。スラムの中にいる人々の生活状況は様々であるし、スラムに居住するようになった背景もそれぞれ違うからだ。

図書館運営をしているとおもしろいことがわかってくる。子供の創造性を引き出す場合、言葉を通してだけではうまくいかない。むしろ人形劇の形をとれば、人形の表情は1つしかないから、見ている人の感情移入により表情が無限になり、自分の意識が外にでてくる。それにより子供の創造性が引きだせる。スタッフ自身それを体験すると絵本を機械的に読まなくなってくる。だがこれはスタッフの資質にもよるので、誰もがうまくいくとは限らない。

図書館も、単に本が並んでいればいいのではなく、子供に本を読んでもらうには、本の並べ方をどうするか、書架の高さは子供の目線を考えるなどのテクニックも非常に重要になってくる。

SVAはタイのNGOの1つ、プラティープ財団と姉妹関係にある。プラティープさんとSVAのタイ事務所長の秦さんが夫婦だからということもあるが、その割には意外とシビアな関係のようだ。SVAがプラティープ財団に手助けを求めても、場合によってはプラティープさんは「それはダメです」ときっぱりと断わる。有馬さんもそんなことをみごとだと言う。

スラム関係のスタッフは秦さんと日本人がもう1人、タイ人が4人いる。どこの団体でも同じだが、人間関係には気を使う。それにタイ人であっても、高学歴の人は固定概念を持ちこむので、住民とのトラブルもあるらしい。これは日本人、タイ人双方にいえることだが、やはりこの活動するスタッフの条件としては、子供が好き、子供といったら心が落ちつき楽しい人でないと向かないようだ。

スラムでの活動をいかに日本に向けてフィードバックするかについては、スタディーツアーやスラム情報などが考えられる。しかしそれがなかなかそう簡単にはできない。その理由は日本人ボランティア、スタッフをみてもそうだが、日本人自身が日本のことを知らないからだと言う。「アジアからの視点」とよく言われるが、私たちが何も知らないということを知られることの方が多い。

最後に今SVAにとって今必要なものは何か尋ねてみた。返ってきた答えは人と金。特に人については1年程度の短期ではなく、2年、3年と腰を落ちつけて活動できる人を求めている。どこのNGOも求めるものは同じのようだ。(正木幹生)

JVCプロジェクト

1988年1月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介 (代表) 星野昌子 (事務局長) 加藤志保, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, 柴田久史 アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション JVC説明会 — 毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時 1月19日にJVC主催で, 新進ピアニスト木幡律子さんによるチャリティ・コンサートが開かれた。コンサートの収益金は全額ラオスのプロジェクトに寄付される。		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト 12月27日(日)埼玉地区の活動者の今村さんを中心に定住者120人が集まり, クリスマス・パーティが行われた。JVCの活動者だけでなく, 地域の人々が積極的に参加する新たな交流の場にもなった。 『もしもしあかね』第5号のためのミーティングが行われ, 編集方針を新たに打ち出した。もっと活動に役立つより良い機関誌をめざしたい。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 横浜キワニスクラブ, 全国老人クラブ連合会, 国際交流ホスピタリティ・トラスト, 禅林寺龍華会基金, 「チャリティ・ウォークかながわ」	山口誠史, 落合正幸, 谷本栄子, 他約60人
	●東金農場 東金農場の今後の発展について, 地元の支援者とJVC代表等の話し合いが続けられている。		井本勝幸, 五十嵐裕昌, 松岡美奈子, 飯塚美奈
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助 他団体に先がけて87年8月より開始したfood for workにより, 現在のところ飢餓の予防に成功している。しかし次の収穫期まで1年間村人の生命を守るため, 約65万人を対象とした食糧配給を続けざるを得ない。食糧, 輸送力, 倉庫の確保を急いでいる。 ●総合的復興促進 - 植林 農民, 母親, 子供を対象に指導, その後家庭植林用に苗木を配布。土壌・水源保全用に植えつけを終えた。 - 保健, 栄養 家庭菜園, 離乳食の訪問形式による奨励が母親自身の手で行われつつある。地元診療所とともに母子健康相談も実施している。 - 給水 清潔な飲料水確保のため, 泉の保護をしている。種子銀行, 農業教室も引き続き行っている。	CRDA, 西本願寺, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全国老人クラブ連合会, バンド・エイド, 東京グリーン・ウォーク, ジャパン・タイムス, モラロジーMIRC, Tree for lifeの会, 栄光学園, 「チャリティ・ウォークかながわ」	加納 妙, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, 山田 盛 イエットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 難民が自主的に作ったグループに、JVCがポンプ・農具・ディーゼル燃料を貸与する、グループファーマーリング方式は順調に進んでいる。この方式をとったミルドバ、シルカロール、アフマッドの新グループを加え、現在農場は133haになる。 ●現金収入プロジェクト かじ屋、パン屋、水屋が進行中、それぞれJVCへの返金は予定通り行われている。 ●コミュニティー・サービス 焼き物、帽子製作のトレーニングコースは順調であり、徐々に製品も売れるようになった。 英語教室もスタートした。	UNHCR, 創価学会青年平和会議, 仏国土をつくろう会	嶋 紀晶, 金子一弘, モハメッド・アブディ, シアッド, 荻ノ迫善六, 船川秀夫, 中岡哲也, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	ソマリア人スタッフとワーカーによって3月(もしくは4月)の終了予定に向かい活動が続けられている。主な日常活動は次の雨期(4月)に難民に配給するための苗木の育成と既存の植林区での水やり作業である。収入プロジェクトはパン屋、ドンキーカートとも、対象者はJVCへの返金を終了し、独立していった。	朝日新聞厚生文化事業団, 砂漠に種をまく人の会, R.I. ジャパン	シュクリ
カンブチア (ブノンベン カンダール県 プレイベン県 スバイリエン県)	雨の少なかった雨期が終った。干ばつのため、全国的に米生産の30～35%の被害が予想され、特にカンダール県、タケオ県、コンボン・スプー県、プレイベン県の4県の被害がひどい。 1. サンタビュップ(平和)技術学校、ワーク・ショップ 1月12日より、技術学校の試みとしての機械工初心者向研修が3カ月のコースで開始された。タックンとディアンが指導に当たり、35人ほどの訓練生が出席している。 ワーク・ショップでは、11月後半にOXFAM・ベルギーの自動車を修理した。現在はWCCの山下氏を通して、カンブチア婦人同盟の自動車(日本の婦人団体連盟より寄贈されたもの)の修理をしている。本格的なトラックの修理を開始するため、日本からスベアパーツを取り寄せている。 2. 井戸掘り/給水(OXFAMと共同) プレイベン県、スバイリエン県で続行中。 3. ブレック・ピノウ孤児院援助 8月13日、男子寮の補修完成。雨漏りもなくなり非常に明るくなった。雨といも水タンクも完成し、あとはトンレサップ川からの給水と浄水システムを残すのみとなった。 4. ライン・プログラム 12月23日、PMI(母子保健局)よりブノンベン郡ラインセンターの建設に関する見積書と設計図が提出された。セメントなどの資材の購入はカンブチア国内で可能となった。 4月からSHAREの本田医師と釘村看護・助産婦が活動に参加する予定。	全国老人クラブ連合会, 創価学会青年平和会議, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILCチャリティグループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡青年僧侶会 覚法寺、「チャリティ・ワーク かながわ」	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, マリー・キャマル, [カウンター・パート] タック・カン, メアス・ サメット, ゲット・ソー ン

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。 季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン、 石原淑子、谷山博史、 カモン・ミンムアン、 スンニー・テイチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 1月9日、1987年度第4期の卒業式があった。卒業生数は174人、現在1988年度第1期の授業が始まっている。 最近、アメリカを中心にカナダ、オーストラリアなどの定住インタビューがにわかになされている。	UNHCR、 SV (Stichting vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム 清水俊弘
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食・栄養保健教育 UNBROからの基金配給の対象が身長110cm以上の女性×2.5(家族分)であったが、家族単位のファミリーノート制にかわり量も増えて、全員が配給を受けられるようになった。 それにともない今年から補助給食のドライパックの対象が3歳以下から2歳以下に引き下げられることになった。 JVCはノンチャンのプロジェクトから今年の3月いっぱいまで引くことに決定した。	WFP/UNBRO	ブーム、チャンチャイ、 トンバイ、スピチャ、 カレン、前野博美、 アドレアン
パナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ●日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み、書き、聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ●日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。	天理教千葉	フォード・順子、 鶴岡善和、北代るり、 アナン・ブダミリンブラ ティープ、 ウィバ・ロンブリック
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 ●クロントイ図書館 子供のための上映会や各種行事を行っている。 ●移動図書 スタッフが交代することもある活動地を縮少し、より密な関係を地域と持つために、活動内容の再検討をしている。 ●移動学習センター(プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト) 12月末をもってJVCのプログラムはJSRCに移行した。 ●農村 チャブーン、コラートなどで活動地選定の調査中である。	モラロジーMIRC、 JOFIC、	バティット・チャンスリヤオン スパチャイ・セーリー、 サムルアイ・ジョンヨークラン、 リーラ・クンナロン、 コメン・スンサマラヤ
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC、 パラワン島)	●国際移民委員会(ICM) — 第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	石井弘代

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (1月小計 166,100円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (1月小計 266,500円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (1月小計 31,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (1月小計 240,000円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (1月小計 17,500円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. デッグ・スラム奨学金・基金 (1月小計 178,750円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (1月小計 0円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (1月小計 22,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (1月小計 53,174円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金 (1月小計 181,625円)

●エチオピア緊急救援募金(12~1月計 3,317,664円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC東京事務所

木幡律子チャリティ・コンサート

1月19日に行われたコンサートには200名以上の方々においでいただき、経費をさし引いた収益金は50万5850円になりました。これはラオスの首都、ビエンチャンに保母教育施設を建設するための資金に使われる予定です。どうもありがとうございました。

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (12~1月小計 1,493,859円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

編集後記

▶海外で活動していると、「日本にも問題はあのに」とか、「身近な問題から取りくむべきだ」とよくいわれる。特に居住問題など、自分たちでさえ高く狭い所に住んでいるのにとっても海外協力など考えられないといわれそう。

ところがである。昨年、江の島で行われた国際フォーラムにタイから出席した居住問題の専門家(女性)が、「これまで日本を支えてきたお年寄りに住む所がないという。私たちに何かできることはないか」と涙ながらに訴えていた。また本誌の中で柴田さんもスラムに住むおじさんが日本の山谷の人々を心配しているという。私たちは住む所ばかりでなく心も貧しくなってしまったような気がする。



昭和63年2月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎ 03(834)2388 FAX: 03(835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セ

ンタービル9F 財神奈川県国際交流協

会内 ☎ 045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円